『Voice』 9月号 通巻261号 pp.87-89 PHP研究所 1999.9.1発行 1999-28

元気を出すための鍵は政治だ

橋爪大三郎（東京工業大学教授）

団塊の世代が元気がないという。私自身、団塊の世代に属する。元気がないとは、どういう意味なのか。

いま、景気が悪い。景気は、どの世代の人びとも同様に包み込んで、よくなったり悪くなったりする。ところが、日が照ったり雨が降ったりするのも、今度の不景気もすべて団塊の世代のせいであるかのような議論がある。けっしてそうではないだろう。団塊の世代とは何ぞやという本質論と、いま団塊の世代がリストラにあったりして厳しい状況に置かれているということは別の話であり、分けて考えたほうがいい。

まず団塊の世代の特徴、本質論を考えてみると、第一に、人数が多いこと。理由はもちろん、戦後の復員だ。アメリカなどにもベビーブームはあった。けれども、戦争の前後で、価値観は連続している。したがって彼の地のベビーブーマーは、ただ人数が多いだけ。ところが日本では、「戦前」と「戦後」では、価値観が異なる。戦後五十年以上たったいまでもその違いが顕著なくらい、違った社会である。団塊の世代は、一から戦後を生きはじめた最初の世代という意味で、まさに戦後の申し子なのだ。

団塊の世代は生意気で反抗的だといわれるが、その理由は、戦後という時代自身が、戦前の権威と価値とを否定するところから出発したことにある。吉田茂、岸信介などの戦前をひきずったリーダーに象徴される価値観に対して、丸山真男に象徴される戦後知識人の一群が新しい価値観を提起した。彼ら戦後知識人は、マルクス主義と民主主義を混ぜ合せて、新しい価値観の底流をつくっていった。

そういう価値観のなかで教育を受けたのが、団塊の世代である。中途半端でどっちつかずの戦後社会が、本物でないような気がし、教わったものを教科書どおりに実行しようとして徹底的に権威に反発する。戦前的なものには戦後的な価値観に立って反対し、民主主義的知識人に対してはマルクス主義を立てて、マルクス主義的知識人に対してはスターリニズムだといって、反対する。

そうやってすべての権威に反発してきたのだが、かつての権威は総退場した。いまや、自分たち自身がその権威を確立しなければならない側にまわった。その役割を担えるかどうか。この意味で団塊の世代は今日、正念場を迎えている。ところが不景気も重なって、とりあえず自分の場所を確保するのが精一杯。自らの権威の確立どころではなくなっている。

特徴の第二には、「移動」がある。農村から都会への移動。そして第一次産業から第二次産業へ、さらに第三次産業への移動。わかりやすくいえば田舎を出て都会で下宿をし、家を構えてサラリーマンになる。親より学歴が高く、親とは違った職業に就く人が多かった。そして高等教育が大衆的に広がった最初の世代でもある。親よりも上の階層に移動し、近代的・知的職業に就くという向上心のようなものに自分も誇りをもっていたため、背伸びをし、本を読んだ。しかしやりつけないことをやっているわけであるから、見よう見真似、著者を批判するまでの力はなく、あくまで背伸びにすぎなかった。にもかかわらず、やたらと批判的ではあった。

そうして権威を批判・否定したけれども、新たな制度をつくりだしたのかといえば、そのアイディアはもっていなかった。リストラの憂き目にあっているのも、すでにある会社という制度にもぐりこみ、そこで地位を得ようとしたから。いまそこからはみ出ようとしているのは、自業自得だ。自分たちでいままでと違った制度をつくっていれば、いまのような受け身の苦しみを経験せずにすんだのではないか。団塊の世代は全共闘世代ともいわれるが、全共闘の特徴は、批判はしても対案を出さないこと。結果として現状維持になり、いま自分で自分の首を絞めている。

この団塊の世代が元気を出すための鍵は、政治だと思う。団塊の世代は人数が多いのだから、本来ならば声が通りやすいはずである。団塊の世代が政治的な自覚をもって動くというのはとても大切なことなのである。

いま日本では、公職選挙法によって選挙運動が公示から投票日までの二週間ほどに限られてしまっているため、日常の政治活動ができない。事前運動を取り締ることで有利になるのは、実績のある現職と、ふだん行政活動をしている官僚、そして宗教団体だ。団塊の世代がはっきり自己主張するためには、地元の選挙区での政治活動に参加し、そこに日常的な政治団体、政党組織をつくり、主体性をもって候補者を選べるようにすることが大事である。これまで「会社人間」といわれてきた団塊の世代も、地域に帰って選挙区で有権者として活動することが大事である。リストラで暇になったり退職したりしたら、逆にそれはチャンスとも考えられる。それが、自分のいる場所をつくる、発言をする、ということではないか。

会社人間ではやっていけないことが、もうはっきりしている。会社人間をやめたあと、どういう人間になるか。人間的完成とは何かと考えたとき、やるべきことは、会社から離れた場面でも活躍ができること。会社と地域と家庭、この三つの場でそれぞれ自分の顔をもつことが重要である。これを団塊の世代の八百万人がしっかりやれば、日本は変る。数のうえで他の世代を圧倒する団塊の世代のもつ潜在力は大きいのだ。

8t-6661

『日本史「名言名句」総覧』第24巻14号　pp.18-19　新人物往来社
1999.3.10発行

■名言名句を語る

「天」のイメージ

橋爪大三郎（はしづめ だいさぶろう）

「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」――福沢諭吉『学問のすゝめ』

この一文に触発されて、人びとは身分の壁を乗り越え、日本人という名のひとつの国民にまとまることになった。人間は本来、平等で対等な存在なのだという近代人の確信を、この一文は表現している。産業化・近代化に必要な不断の向上心（エートス）を、この書は日本人に供給する役割を果たした。

「人」については、このようにわかりやすい。だが、ここにいう「天」とは何か？

天が人を「造る」というのだから、いちばん素直な解釈は、創造神、すなわち一神教の神（God）であろう。中国人はこれを「天帝」「天上的父」などと訳した。そこで『学問のすゝめ』の冒頭は、「西欧世界には神というものがあり、神がすべての人びとを平等に造ったと信じられている。日本でもこれからは、人間は平等でなければならない」、という意味になる。

いっぽう、儒教にも「天」の概念がある。儒教の天は、人格でなく、抽象的な原理のようなものだから、人間を造ったりはしない。けれども、太陽のようにそこにあり、人間を平等に見守っている。キリスト教よりも儒教のほうがなじみ深い読者にとっては、そう考えればわかりやすかった。

さらに、ここに天皇のイメージが重なる。「天」の字を名前に冠する大日本帝国の主権者は、臣民に等しく君臨するものと憲法に定められた。日本国は、天皇を中心とする共同体に再組織されていった。この結果、冒頭の一文は、「天皇のまえではすべての人間が臣民として平等であるから、等しく天皇ならびに国家のために尽くさなければならない」と読み替えられることになる。

明治から昭和にいたる日本の近代化の特徴は、天皇の名のもとに、国家が大きな役割を演じたことである。のみならず国家は、人びとのほとんど無限の献身を要求する、巨大な存在に変貌していった。

なぜ、そのようなことが可能だったのか。西欧世界では、政治と宗教は明確に分離しており、国家はあくまでも世俗の機構だった。人びとの良心を支えるものは信仰（教会）であり、これを手がかりに国家に抵抗することも可能だった。これに対して大日本帝国は、世俗の機構である国家が教会を兼ねており、国家の長である天皇が同時に神道の主宰者でもあった。人びとは、この国家の成員であるかぎり、天皇の権威から逃れることができない。国家は、人びとの神聖な献身の対象であり、良心を代表する。

日本のこのシステムは、近代化のエネルギーをもっとも効率的に動員することに成功したが、反面、国民が国家をコントロールすることを不可能にしてしまった。その結果、どのような災厄が訪れたか、歴史を見れば明らかである。それもこれも、「天」を明確にイメージできなかったツケなのである。

（東京工業大学教授・社会学）

『東京工業大学外国語研究教育センター NEWSLETTER』 第6号 pp.3-6 東京工業大学外国語研究教育センター
1999.5.20発行

歓迎、中文班！（ようこそ、中国語クラス）

社会理工学研究科価値システム専攻教授　橋　爪　大三郎

もともと中国語とまったく縁もゆかりもなかった私が、いったいどういう風の吹き回しで、中国語の自主講座を開いたり、中国のロック歌手をインタビューしたり、中国語の本を翻訳したり、毎年学生を連れて中国研修旅行に出かけたりするようにまでなったのか。それを不思議に思われた馬越庸恭前センター長から去年の暮れ、原稿の依頼があった。それに応えて、その経緯を東工大の皆さんにご紹介しよう。

中国語に入門

私が最初に中国を訪れたのは、1988年。友人の落合仁司氏（同志社大学経済学部教授）が、その当時、なぜか中国フリークのまっ最中で、夫人（落合恵美子氏、当時同志社女子大助教授）とその学生を連れて、上海に一箇月間短期留学するという。ぜひ一緒に行こうと誘われて、その気になった。

最初の予定では、２月に出発するはずだったのが、飛行機を手配する間際になって上海名物の毛ガニで食中毒が出て、五万人が病院に担ぎ込まれる騒ぎになった。そこで出発は、８月に延期になってしまった。どうせならその間、中国語でも習っておこうか。それも、中高の６年間でちっとも話せるようにならなかった英語の二の舞はごめんだ。せっかくなら、話せるようになりたい。そこで広告をみつけた、「中日会話学院」という近所の学校に通って、中国語会話を習うことにした。

藤沢のビルの一角にあったこの学校で、副院長の楊麗華老師（laoshi）のクラスに入る。楊老師は黒竜江省の出身で、文化大革命のさなか十代後半で来日。紅衛兵がやってきたとマスコミに騒がれた女性だ。その後、NHKテレビの中国語会話教室のレギュラーを長年つとめ、同時通訳としても活躍。結婚後は夫君（院長）と二人で、中日会話学院を経営している、この業界では有名な人である。

楊老師は日本語もうまいが、教室ではほとんど中国語を使う。昼間のクラスなので、受講者は家庭の主婦がほとんどで、中国語で受け答えしている。私は曜日の関係で、既習クラス（学習歴１年）に入ってしまったので、右も左もわからず、最初の２ヶ月はまったくの「お客さん」状態であった。それでも予習・復習を言われた通りにやり、家でも会話のテープをつけっ放しにしていると、うれしいことに、だんだん言葉が聴き取れるようになるではないか。あら嬉しや、と頑張って、中国へ出発するまでにはなんとかカタコトで買い物ぐらいはできる程度になった。

上海は改革開放熱の真っ只中

上海の虹橋空港までは、中国国際航空のジャンボ機で、日本から２時間あまりだ。

受け入れ先は上海工程技術大学といい、もとは上海交通大学の一部だったという。学内の招待所に泊まるはずが、連日35度以上の猛暑のため、急にエアコンのある近くのホテル（一泊60人民元の低料金）に変更になった。築１年というのに、築30年は経っているのではないかといぶかられる、くすんだビルの一室に落ち着く。

上海のバンド（外灘）の一帯は、租界時代の洋式高層建築が建ち並んで、見るからに近代都市といった外観だ。そして上海は、確かに人口一千万を越える大都会である。しかし一歩裏通りに入れば、洗濯物がへんぽんと翻り、いたるところに西瓜の皮が散乱し、ハエが飛び回り、戦前の洋館を５～６家族が仕切って住んでいるという住宅難。第三世界そのものと言っていい人びとの生活がそこにはあった。繁栄を謳歌する日本と海を隔てたすぐ隣に、まったく異なる12億人の中国が存在していた！

ホテルのすぐ前が川になっており、数隻の木造船が停泊している。聞けば、出稼ぎに来た上海近郊の農民が住んでいるらしい。自炊しながら、昼間木っ端を拾い集め、大きさごとに仕分けして工事現場に売るという、みみっちい商売だ。ホテルで売っている缶コーラは３元だが、同じ金額を一日に稼げればよいほうだろう。物価の落差に、目のくらむような思いがする。

肝心の中国語のほうは、上海ではほとんど通用しない。あたりで話されている上海語はまったく聞き取れない。私の習った北京語は、標準語なのでいちおう通じるのだが、ここではまるで外国語の扱いである。

中国の「西北風」やロックと出会う

言葉があまりわからないので、音楽を聞こうと、カセットテープを買い集めた。当時、友人の細川周平さん（現東工大助教授）らとポピュラー音楽の学会設立を準備していたところだったので、改革開放間だもない中国のポピュラー音楽を調査してみようと思い立つ。たまたま上海で中国語を教えてくれていた先生が、上海テレビ局に知り合いがいるというので、通訳の人を伴って、インタヴューに向かう。音楽番組の担当者と話を聞くことができた。流行っているのは大部分、香港・台湾のポップスだけれど、数年前から北京を中心に、「西北風（シーペイフェン）なるブームが起こって、大陸っぽさを強調した国産のポップスも人気をえていると教えてもらう。

短期留学のしめくくりに５日間、北京を旅行した。北京大学キャンパスの、留学生寮に泊まる。新聞をみてみると、「霹靂風演唱会（ブレークダンス＋コンサート）」なるものの広告が出ている。これを見逃す手はない。知り合った北京大学の学生に、切符が買えるのか聞いてみると、人数分手配してくれたうえに、運転手付きのコースターで迎えに来てくれた。会場の工人体育館まで小一時間、ツッパリ風に着飾った若者らで一万人収容の館内は満員である。コンサートは、つぎつぎ歌手が現れてヒットソングを披露するという、よくわけのわからないものだったが、けっこう楽しめた。

録音した会場の模様や買い集めたテープを、日本に帰ってから整理して、「西北風」の全貌を理解するようにつとめる。陳凱歌監督の「黄色い大地」や張芸謀監督の「赤いコーリャン」などの映画や、文学、ロック、ポップスを含む文化運動であるという輪郭がつかめた。東京で幸運にも、折から来日中の、西北風のヒット曲「黄土高坡」を作曲した蘇越（スーユエ）さんと知り合う。陳凱歌監督が東京を訪れた折りにはスケジュールの合間をぬって、箱崎でインタヴューもさせてもらった。蘇越さんとは二度ほどテレビ神奈川の音楽番組に出演して、中国のポップス事情について紹介したりした。

そのうちわかったことは、中国最初のシンガーソング・ライター、伝説的なロック・スター、崔健（ツイジエン）という人物がもっとも注目に値するということだ。崔健さんのヒット曲「一無所有（俺には何もない）」の演奏は、「ソウル・オリンピック」を記念した国際衛星放送番組で北京のスタジオから生中継され、録画を見たがなかなかすごい。工人体育館のコンサートでも「一無所有」は満場の喝采を受けていた。彼のことを、日本できちんと紹介したい。来日コンサートの楽屋に飛び込みインタヴューの約束をとりつけ、北京に出かけるなど何年も苦労して、『崔健』（岩波ブックレット）を出版する。彼のアルバム「紅旗下的蛋（ボールズ・アンダー・ザ・レッド・フラッグ）」（東芝EMI）の、歌詞やライナーも担当することができた。

激動の中国、台頭するアジア

話は戻るが、1988年の夏、初めて訪れた北京は、改革開放の熱気のさなかにあった。私のような一旅行者にもそれはひしひしと感じられた。その熱気は、過熱と言ってもいいほどだった。それが翌年、ゴルバチョフ・ソ連大統領の訪問をきっかけに、６月４日の天安門流血の惨劇を迎えるとは、まさか思ってもみ

なかったけれども。

それから10年。幾度となく中国を訪れ、多くの中国の人びとと知り合い、語りあった。年ごとの目を見張るような変化を、ずっと追いかけてきた。そして、来世紀は中国の時代になるだろうと確信した。1989年『朝日ジャーナル』に「中国将成世界超大国」という文章を書いたころ、本気にする人は少なかったが、バブルのはじけた昨今では誰しも、日本が中国に追い抜かれるのは時間の問題と考えるようになった。

世界の地殻変動が生じている。ヨーロッパの19世紀にとって代わったのが、アメリカとソ連の両大国だったように、21世紀は中国を中心とするアジアの台頭によって特徴づけられよう。福沢諭吉の「脱亜入欧」をモットーに、欧米なみの近代化をめざしてひた走ってきた日本。日本人は、日本だけが抜けがけに近代化するのは当たり前と考えてきた。しかし、気がついてみれば、ついにやってきた東アジア全体の怒涛のような近代化が、日本を呑み込もうとしている。

こうした変化は、大部分の日本人にとって、思いもよらないことだった。だから、心の準備ができていない。韓国についても、台湾についても、香港についても、中国についても、基本的な知識がない。アジアの言葉ができる人も少ない。21世紀を迎えようとする日本にとって、これはピンチではないだろうか。

そう考えた私は、ささやかながら、中国の文化や思想を紹介し、中国語を普及し、中国の人びとと交流する試みを始めることにした。

中国との出会いが東工大を新しくする

中国語の自主講座を開こうと思ったきっかけは、たまたま私が、日本文化研究の国費留学生を中国から受け入れたから。天津から来た彼女（Ｚさん）は、外国語学院日本語学科の出身で日本語がうまいし、教え方もうまい。そこで学内にポスターを貼り、受講生を募ったら、教室に入りきれないほど学生が集まった。そうか、東工大にも中国語を習いたい学生がこんなにいるんだ。自信を深めて、彼女と二人で一年間、会話のクラスを開く。

彼女は翌年、帰国したので、別の中国人留学生にバトンタッチし、会話クラスは去年まで、足かけ５年続いたことになる。東大で教員をしている後輩に聞けば、東大生の中国語履修率は年々高まり、文系理系をあわせて30パーセントに迫る勢いだという。中国語の正規の授業を開いていない東工大が、立ち遅れてしまうのではと心配になった。

もうひとつの活動は、中国研修旅行である。５年前、学部一年生向けの総合Ａの授業でグループ自由研究を課題にしたら、そのうちのあるグループが中国を研究したいという。それなら連れて行ってやろうと、６人を天津、上海に案内した。その成果を見極めて、翌年には三年生向けの総合Ｂの授業として、「中国研修旅行」を実施。かねてから共同研究相手として行き来のある天津社会科学院・日本研究所に受け入れを頼み、三峡ダム建設予定地を見学するコースを手配してもらった。以来、旧満州、シルクロード、雲南省と、今年まで毎年、合計４回の研修旅行を実施した。

日頃はおとなしい東工大生が、旅行に出ると生き生きとした人間味をあふれさせる。ある女子学生は、重慶の街で裸電球の下、そこここで食卓を囲む家族や、天秤棒を担いで荷物運びの出稼ぎに来ている数十万の近郊農民の姿を見ているうち、人間の生き方はさまざまで、もっと自由に生きてよいのだと悟ったのだそうで、その年に東工大を中退して国立大医学部を再受験。いまは医師への道を進んでいる。彼女ほどドラマティックでないにせよ、中国研修旅行を機会に、すべての学生が何か大事なものを掴んだ様子がうかがえる。

その中国研修旅行も、今年度から中国研修「留学」として再出発することになった。本学の学部に、短期留学の制度が整備され、学生が申し出ることにより、外国の大学研究機関で単位取得が可能になったからだ。中国側の協力により、この制度が東工大の学生に貴重なチャンスを提供し続けてくれることを願っている。（中国研修旅行については、『東京工大クロニクル』98年11月号に書いた紹介記事も、あわせて参照されたい。）

戦前～戦後を通じて、日本の科学技術はあまりにも、西欧ばかりを向いてきた。西欧を模倣する時代がとっくに終わりを告げ、独創的なアイデアが求められるいま、アジアの一角に立地するという自分の足元を見つめ直してもよいころだ。アジアからの留学生がキャンパスに集っている、東工大の日本人学生も、中国をはじめとするアジア諸国に目を向けるべきであろう。中国と出会うことで、東工大は新しくなる。

中国語クラスの誕生を歓迎する

このほかにも私は、社会学者の王輝（ワンフイ）教授の著書『中国官僚天国』（岩波書店）を翻訳し、中国から学者を招いてシンポジウムを何回か開き、中国の雑誌に原稿を寄稿し、清華大学との提携の強化に努めるなど、中国の学者との交流に力を注いできた。しかし、私一人でできることには限りがある。

そんなとき、東工大でもいよいよ98年４月から、中国語の講義が始まることになった。そして札幌大学から、気鋭の文学研究者・劉岸偉氏が助教授として着任された。これも、外国語研究教育センターをはじめ、関係者の理解と決断と支持のたまものであろう。東工大のために、まことに喜ばしい。

これは、大きな変化の最初の一歩に違いない。英語が国際標準言語として、東工大のキャンパスでもますます通用すべきなのは当然だが、それに加えて、アジアの言語を理解する学生・教職員が増えることが大切だ。アジア地域との共同研究、アジア企業との合弁などは、今後急速な拡大が予想される。東工大生がそうした一線に立って、活躍する日も近い。21世紀は、アジアの世紀である。東工大が、言語の国際化の面でも、時代に先駆けて進むように望みたい。

（はしづめ　だいさぶろう・社会学）

おまけ『コリーグ』広島大大学教育研究センター通信 1998.11 p.23

橋爪　大三郎

1．1948年10月21日
2．東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授
3．社会学
4．

昨年秋から，社会経済生産性本部・社会政策特別委員会で，専門委員として活動し，７月に中間報告「選択・責任・連帯の教育改革」を公表しました。大学に関しては，学生定員の廃止，入試の廃止とキックアウト制の導入，奨学金の大幅拡充などを提言しています。ＮＨＫの視点論点，毎日新聞，朝日新聞，日本経済新聞の文化欄でも，この趣旨を紹介しました。中間報告の全文は，私のホームページhttp://www.valdes.titech.ac.jp～/hashizmで読むことができます。

おまけ『ファム・ポリティク』通巻273号 p.19 政策を提言する女性の会 1999.3.25 発行

本紹介

「選択・責任・連帯の教育改革」岩波ブクレット No.471
堤清二・橋爪大三郎

社会経済生産性本部の「教育改革に関する中間報告書」の内容のほとんどと、堤清二・橋爪大三郎両氏の対談を集録したもの。報告書起草の精神的背景を知るために最適のブックレットとして、「選択・責任・連帯の教育改革」の原文を手に入れたい方におすすめしたい。

対談の中で橋爪氏は、「現在の学校は監獄にそっくりです」と指摘、校長も教員も生徒も、いつも自分からは見えない誰かに見られているのではとおびえている。それは入学試験だったり、文部省の通達や指導要領だったり。改革案は「自分がもう一度学校に行くのであれば、こんな学校だったら行きたい」と思えるものをつくったと語る。

両氏の提言する改革の基本姿勢と目的は「学校の機能回復、教育機能の回復」であるが、それが実現したらどんなにすばらしいだろうと思わずにはいられない一冊である。

ＢＳ１　地球法廷　第５シリーズ「教育を問う」　　　　　2000.1

「自由化・多様化で大学に活力を」　　橋爪大三郎（男/51/社会学者）

学生定員の縛り用によって入学者がほぼ全員卒業する現状は、大学教育がうまく行っている証拠ではなくて、大学教育が空洞化している証拠である。卒業生に対する社会的な評価も、入学時の学力によって決まり、本人が大学でどういう教育を受けたか、どれだけ頑張ったかには左右されない。この根本をまず変えなければならない。

以下は、私たちが社会経済生産性本部の提言としてまとめた『選択・責任・連帯の教育改革』にもとづいた大学改革案である。

大学は、コストを負担すれば、原則として誰でも入れるものとする。学力を社会に対して保証するため、大学の責任で卒業を厳しくする。学生定員をなくし、学生が自由に大学を選べるようになれば、人気のない大学は淘汰され、どの大学も教育や研究の中身で勝負するようになる。

このためには大学は、設置の目的も明らかにし、どのような内容の教育を行なうのか、はっきりさせる。その上で、各大学は、卒業生に要求すべき学力・知識のレヴェルを、独自に設定すべきである。たとえば、

●最高水準の学者を育て、研究を進める「科学技術先端大学」
●企業の必要とする人材を供給する「ビジネスマン養成大学」
●地域の人材養成や生涯教育に貢献する「地域密着市民大学」

など。

「科学技術先端大学」は、日本に１ダースもあればよいだろう。研究費や大型の実験設備を集中するかわりに、世界を相手に、業績本位の厳しい競争を勝ち抜いていく大学だ。地道な基礎研究、企業の委託研究など、産学共同も自由にできるようにする。「ビジネスマン養成大学」は、さまざまな職能をもった専門的な人材を養成し、社会に送りだす。大学では、経営、管理、財務など、企業の必要とする分野を学ぶいっぽう、語学、法律、コンピュータなどの能力や資格も身につける。大学が実学の場になるから、学生はわざわざダブル・スクールに通う必要もなくなる。「地域密着市民大学」は、地域社会の核となって、地域に必要な人材の養成や再教育を行なう。すべての住民に文化・教養などの情報を発信し、住民の社会参加を組織し、生涯教育の場となる。

大学は、カリキュラムの内容や難易度などを、自分で決めればよい。規制をなくし、大学がそれぞれの個性を競い、社会にどれだけ貢献したかを競いあうことで、大学に活気がもどるであろう。

なお、これら提言の概要は、こちらリンクサイトにある社会経済生産性本部のホームページで公開している。

参考書籍：堤清二、橋爪大三郎　編『選択・責任・連帯の教育改革』勁草書房

毎日新聞　（夕刊）　1999年（平成11年）12月28日（火曜日）

Y2Kとミレニアム

うってつけの都市伝説

東京工業大学教授　橋爪大三郎さん

新ミレニアムの到来だと世界中が騒いでいる。イエスの再臨を指折り数える西暦の精神はどこへやら、人びとは、資本主義のゲームに熱中している。

イスラム社会にはイスラム暦、ユダヤ教にはユダヤ暦と、どんな社会も独自の時間の尺度をもっていた。

ところが、コンピューターが世界中にネットワークを張りめぐらした結果、西暦だけがますます大きな顔をしている。たまたま西暦でゼロが三つ並ぶからといって、世界中が大騒ぎしなくてもいいはずだ。

だが、つながっているはずの時間に切れ目があるとなれば、つい危険を感じるのが人間の習性だ。

19世紀の終わりにはほうき星が現れ、人びとはしっぽの毒ガスに巻き込まれるかと本気で心配した。20世紀のほうき星がY2Kではないだろうか。

コンピューターの時計が、来年の「00」を1900年と間違えるのだという。最近のコンピューターやソフトは対応ずみだ。それでも、何かの切れ目に「危機」が顔をのぞかせるという都市伝説にはうってつけだ。

「危機」だとみなで騒げば、未知の世紀を迎える不安をうまくやり過ごせる。21世紀がどんな時代か、まともに心配し始めればきりがない。20世紀の運命がわかっていたら、19世紀末の人びとはお祝いどころでなかっただろう。私たちも同じではないか。心配ごとがY2Kだけとはいかにも呑気すぎる。

『ポピュラー音楽研究』vol.2　pp.117　日本ポピュラー音楽学会　1998.11.30発行

after hours

国際化・全球化の時代は、多文化・多民族状況を意識する時代でもある。ひと足先に国際化の進んだ西欧諸国、特にアメリカでは、多文化・多民族を反映したカルチュラル・スタディーズが全盛であり、ポピュラー音楽研究もその一角で重要な役割を演じている。

これに対してわが国の状況は、まだまだ出遅れていると言ってよい。さすがにポピュラー音楽研究のパイオニアや草分けの時代は去り、「ポピュラー音楽をどうやって研究なんかするの？」という初歩的な質問も聞かなくなって久しい。若手の研究者もつぎつぎ育ちつつある。そのことは、会員の増勢からも見て取れ、喜ばしいことではある。それでもまだまだ、課題は多い。

わが国には国内に、複数のエスニック・グループが競い合う状況が（まだあまり）ないために、ひと昔前の「ワールド・ミュージック」が“日本人も世界中の音楽を聴いてみました、おしまい”になってしまったように、自己確認・自己表現のための音楽という側面が弱い。かつての洋楽／邦楽は、都市／農村の階層構成にゆるやかにリンクしていたが、消費社会以降はそれもあいまいになってしまい、誰もが同じ母集団のなかから音楽を選んで聴く（何を聴くかは個人のテーストの違いによる）という、同質的な状況が支配的だ。

こうした状況に影響されるのは仕方のないこととは言え、日本のポピュラー音楽研究はこのために、いくぶん発想のスケールが小さくなってしまっている気がする。ほんとうは音楽は、ほんの入り口であり、政治も経済も家族も文化も思想も階級も、何もかもが絡み合った複合的構造に切り込むのが、ポピュラー音楽研究の醍醐味のはず。そのためには、ポピュラー音楽ばかりを研究していてはいけない。叩けよ、さらば音が出る（あれ？）、もとい、少年よ、太鼓を叩け（あれれ？）なのである。

（橋爪大三郎／理事・会長）

編集委員：橋爪大三郎・森田信一・西村秀人・大倉恭輔（理事会）

ポピュラー音楽研究　Vol.2
Popular Music Studies
ISSN 1343-9251
発行日　1998年11月30日
発　行　日本ポピュラー音楽学会
The Japanese Association for Study of the Popular Music
編　集　日本ポピュラー音楽学会編集委員会
191-0016　東京都日野市神明1-13-1
実践女子短期大学生活文化学科　大倉研究室内
TEL 042-584-5000（代）　E-mail：ohkura@air.ne.jp
印刷所

日本ポピュラー音楽学会（JASPM）事務局
185-0021　東京都国分寺市南町1-7-34
東京経済大学コミュニケーション学部　山田研究室内
TEL/FAX 042-328-7923　E-mail：yamada@tku.ac.jp
http://camp.ff.tku.ac.jp/YAMADA-KEN/JASPMoffice.html

本誌は実際には99年3月に発行された。

『建築ジャーナル』　第959号　pp.38　企業組合　建築ジャーナル　2000.1.1

1月号特集　建築家と市民、各界専門家に聞く

21世紀に残したい日本の建築

■市民・各界専門家編

ワースト1はさしずめ旧朝鮮総督府だが…

橋爪大三郎（社会学者）

Best

旧三井本館
トローブリッジ・アンド・リビングストン／1929年／東京都中央区日本橋

旧台湾総督府（現総統府）
1919年

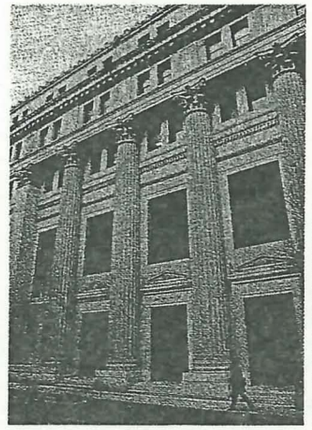
迎賓館（旧赤坂離宮）
建設大臣官房官庁営繕部、村野・森建築事務所／1974年(改修)／東京都港区赤坂

Worst

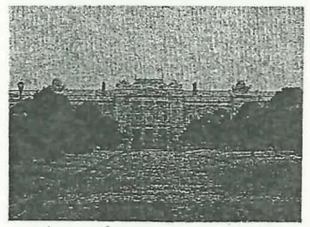
国会議事堂
大蔵省臨時議院建築局／1936年／東京都千代田区永田町

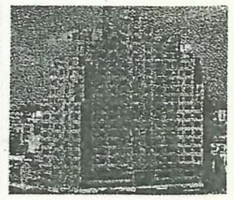
旧満州国政府庁舎（新京→長春）

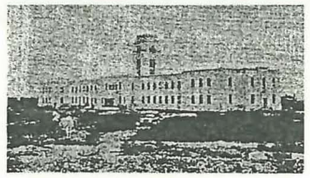
上海大厦（たいか）
（1934年にイギリス人が建てたマンションをホテルにしたもの。上海バンドの旧日本租界に、どでんと建っているただ高いだけの、魅力のない建物です）



左上：旧三井本館
左下：迎賓館
右上：旧台湾総督府







左上：国会議事堂
左下：旧満州国政府庁舎
右上：上海大厦

戦前の建築ばかりになってしまいました。旧三井本館は、資本主義を日本でもやっているのだぞという精一杯の意気込みと華やかさが感じられる。團琢磨の暗殺現場でもあってベスト入り。旧台湾総督府は、南国的なのびやかさを感じる。迎賓館はいかにもつくりものだが、ロココ自体がつくりもの的なのだから、その点ではまっとうだ。

ワーストのトップはさしずめ旧朝鮮総督府だが、取り壊されてしまったので、日〜満〜中の三角形を象徴する建物を選んだ。旧満州政庁の建物は、外観はともかくとして、内部に空間というものがなく、天井が低くて重苦しい圧迫感がある。上海大厦は、和平飯店の隣にこんなものを建てていいのかと心配になるぐらいの醜悪な建物。その奇怪さは、平壌の柳京ホテルに通じるものがある。

東京工業大学大学院社会理工学研究科教授・社会学。主な著書に、『はじめての構造主義』『性愛論』『言語ゲームと社会理論』『橋爪大三郎の社会学講義』など。

「昭和・平成　私のメモリアル・デイ」　　1999.11

昭和４３（１９６８）年６月１５日

橋爪大三郎

昭和４２年に東京大学教養学部文科Ⅲ類に入学した私は、これまでの受験生活と正反対のことをしたいと考え、駒場のあるサークル劇団に入ることにした。オリエンテーションの期間に観た公演は『回転木馬』で、ほのぼのとした古典的な舞台だからよいだろうと思ったのだが、夏休みの間に前衛劇団に衣替えしていたのが運のつき。当時はやっていたアングラ演劇の真似ごとのようなことが始まって、自由劇場を借りての舞台など２回の公演がすんだころには、気がつけばもう９ケ月も授業に出ていない。そろそろ教室に戻ろうと思っていた矢先、６月15日に安保闘争を記念して、日比谷小音楽堂でパフォーマンスがあるという。佐藤信さんの「自由劇場」や、瓜生良介さんの「発見の会」といっしょに、私たちも参加することになり、フラワー・ムーブメントのヒッピーのような扮装で寸劇を演じたり、ビラを配ったり、パレードをしたりという一日であった。ちょうど同じ日に、６月15日を記念して、東大医学部共闘会議の学生たちが、赤ヘルメットにゲバ棒のいでたちで、安田講堂を占拠しようとは知るよしもない。

日曜日を挟んで、機動隊が安田講堂の学生たちを追い出した６月17日の駒場は蜂の巣をつついたような大騒ぎ。ちょうど直前の自治会選挙で、共産党系の民青が敗れ、執行部がフロント（構造改革派）に交替したところだった。校門をくぐるなり分厚いビラの束を渡されて、授業は当然すべて中止となりクラス討論に切りかわる。昼までには、自治会が手回しよく手配した観光バスが続々キャンパスに到着し、駒場の学生 6千人が大挙本郷の全学抗議集会に押しかけることになる。誰も予想もしなかった、「東大闘争」の幕開けである。そのあと私は、演劇と闘争のふたまたをかけるかたちになり、実にさまざまなことがあり、嵐のような一年間をすごし、消耗し、気がつけばまるまる 2年半も教室に足を踏み入れないままとなるのであった。

『教育ジャーナル』　第38巻第12号　pp.5　学習研究社　2000.2.1

巻頭言

「宗教」を教えない日本

日本の学校では、宗教について教えないことになっている。小学校から大学まで、釈迦やキリストは歴史上の人物として習うだけ、宗教についてごく基本的なことも知らないまま社会に出てしまう。これでいいのか。

いまたまたまボストンに住んでいるが、近所に教会の多いことと言ったら、日本のコンビニ並みだ。しかもみな活発で、宗教が人びとの生活に根を下ろしているさまがうかがえる。家族ぐるみで教会に通う一家が多く、キリスト教にもとづいて躾が行われる。

学校教育も、社会の運営も、これを前提にしているので、話が早い。ふだんは個人主義的、議論百出でちっともまとまらないアメリカ人だが、いったん災害や戦争となると、ファシズムも顔負けの規律・統率が行き渡る。緊急時にどうふるまうかは、神の与えた試練と考えられているのだ。

日本人は、アメリカの民主主義を表面的にしか見ないから、ここが理解できない。物質文明に慣れきって、真珠湾を攻撃すれば戦意をなくすはずだったアメリカ人に、あべこべにこてんぱんにやっつけられた。戦後、民主主義を取り入れたのはよかったけれど、それは「みんなが仲良くすること」と誤解され、結局は「根回し」「全員一致」になってしまった。

それもこれも、「神」のなんたるかを、日本人が知らないせいである。皇国史観に懲りたのだろうが、戦後教育は宗教を避けて通ってきた。若者に聞いても「はまると怖い」「金に汚い」と、マイナス・イメージしかもっていない。

これではいけない。国際社会を理解するカギは宗教だと、東京工業大学で毎年、「宗教社会学」を講義している。教会見学を課題にすると、「変なビスケットを配るから食べました」という学生が続出。洗礼を受けないと聖餐にあずかれないことを知らないのだ。それでも期末試験では、答案の欄外に「自分の偏見に気がつきました」「宗教について誤解が解けてよかった」と書く学生が多くいる。

ただ、大学生になってからでは遅すぎる。小・中学生のころに、宗教に対する敬意と理解を身につける必要がある。公立学校がさまざまな宗教から中立であることは当然だが、それでもできることは沢山あるはずだ。

私も「宗教社会学」の講義を教科書のかたちに書き直して、日本中の親、教員の人びとに読んでもらいたいと計画している。日本人が自分の価値観を確立するのに、それが役立つとしたら嬉しい。

橋爪大三郎

はしづめ・だいさぶろう●1948年、神奈川県生まれ。東京工業大学教授。社会経済生産性本部・社会政策委員会専門委員長、日本社会学会理事。『はじめての構造主義』『橋爪大三郎の社会学講義』など著書多数。